

たしは白い墓を見た。その墓穴から面被をかぶつた女が服部さんと並んで出てくるのを見た。美智子を案するわたしの思ひは、わたしの心の奥底から湧きいづる泉のやうに迷はしつた。それは苦しい水であつた。美智子が伯爵とカルタをやる小卓子にゆくためにわたしの前を過ぎたとき、わたしは堅くかの女の手を握りしめて、熱い接吻をした——それが最後のわかれでもあるやうに。皆んながびつくりしてわたしを見たので、わたしはそれらの視線を避けるために、庭へ向つた戸口から密と外の間に忍び出た。わたしは自分自身からも隠れたかつたのである。

この晩は、皆んながいつもよりも大へん遅くまで客間にゐた。夜中に近い時刻になつて、急に、樹の間をわたる風の陰鬱な低い呻りが、夏の夜の沈黙をやぶつた。われは突然に大氣が冷えわたるのを感じた。風の起つたつ氣配を最初に告げたのは伯爵であつた。さうして、皆んながめい／＼の部屋へ引きとるときに、彼はわたしのためにカンテラを點しながら、わたしを警告するやうに手を揚げて、こんなことを云つた。

「あの風の音をお聴きなさい。明日は天氣が變りますよ。」

一七、くひちがひ

六月十九日——昨日起つたいろ／＼の出来事は、やがてわるい結果が來るといふことを、わたしに告げてくれた。そして、今日の一日はまだ終らないけれど、そのわるいことが既に來たのである。

美智子とわたしは、昨日の時刻から推しはかつて、加奈子が今日も午後の二時半には四阿へ來る筈だからわたし達もその時刻に彼處へ會ひにゆくことに決めた。わたし達はその手筈を相談した。まづ晝餐が済むと、美智子はよい機會を見てなるだけ早く食卓を離れて、一人で出てゆく。二人一しよだと勘づかれるから、まづ美智子が一人で出てゆく、そして二時半前に四阿へ行きつくやうにする。わたしはその頃に食卓を離れて、庭へ出て、三時まで森の中の適當な場へ行きつくやうにする。さういふ手筈をきめた。

ゆふべの風で豫知したやうに、天氣は今朝になつて變つた。わたしが起きたときは、ひどい雨が降つてゐて、午前一ぱい降りつゞいた。だが幸ひにも正午から雲が裂けて、蒼空が見えて、太陽はふたたび輝りはじめた。

わたしは、伯爵と伯爵が今日の午前をどんな風に送るかゞ氣になつて、よく／＼二人の行動に注意した。男爵には格別怪しい節もなかつた。彼は朝の食事が済むと、すぐに雨を冒して、たつた一人で外出した。何處へゆくとも何時歸るとも云ひ残さなかつた。わたし達は、雨コートを被て、長靴を

穿いて、朝の食堂の窓の外を歩いてゆく男爵の姿を認めた。それだけであつた。

伯爵は家の中で午前を静かに送つた。圖書室で讀書をしたり、客間へ行つてピアノに坐つたりした。見てゐると、感傷的なこの人の性格は、どうしても隠しきれないやうであつた。彼は黙りこんで、物事に感じやすくなつて、少しの刺戟にも溜息をついたり、ふさぎ込んだりした。もつとも肥満した人は、よく溜息をしたり、ふさぎ込んだりするものだけだ。

やがて晝餐時が来た。男爵はまだ歸つてこない。食卓では、伯爵は友の席についた。彼は殆んど一瓶のクリームをかけた果實パイをけろりと平らげてしまつた。

「甘いもの好きといふものは、婦人や子供の趣味で、まつたく罪がない。」と彼は柔和に云つた。「頼もしいことには私もその御仲間の一人です。これで、皆さん御婦人方と私の間にもう一つの結びが出来たわけですね。」

美智子は、十分ほど経つてから食卓を離れて、室外へ出ていつた。わたしも一しよに行きたかつたけれど、じつと我慢した。

わたしはじつと待つた。やがて召使が食卓の掃除に来たのを機會に立ち上つて、食堂を出た。まだ男爵の歸つてきた様子が見えない。伯爵は氷砂糖を自分の口に喰へて、例の意地わるな鸚鵡に、胴衣

を登つてそれを取らせようとしてゐた。夫人は良人と向きあつて、良人と鸚鵡の仕草をば、今までそんなものは見たことがないやうな、熱心を以て見まもつてゐた。

わたしはそうつと森の方へあるきながら、食堂の窓に注意したが、誰もわたしに気が注いだ者がないやうであつた。わたしの時計は三時十五分であつた。

わたしは森へ入ると、大急ぎで中ほどまで行つて、それからは一歩々々に氣を配つて進んだ。幸ひに人の姿もなかつたし、聲も聞かなかつた。とうとう四阿の後手へ忍んでいつた。その邊にも人のゐる様子がないので、ほつと安心した。それから四阿の右手や左手へ廻つてみたけれど、やはり誰も見てゐる者がなかつた。

それで、わたしは大膽に四阿の正面へ廻つて、戸口からそつと覗いてみた。ところが、案外にも内部は空っぽであつた。

「美智子さん」と低い聲で呼んだ。返事がない。「美智子さん」と今度は少し高く呼んだ。やはり返事がない。誰も出て来る者もなかつた。この寂しい沼のほとりで、人間の姿をしたもの、聲を出してゐるのは、わたしだけであつた。四邊はひっそりと静まりかへつてゐた。

わたしは、はげしく動悸がして来た、だが、氣を取りなほして、まづ四阿の内部を隈なく探した。

誰もゐない。美智子がこの内部へ入つた形跡もない。それから外へ出て、四阿の前の方をしらべた。その砂地に足跡の残つてゐるのを発見した。

それは二人でふんだ足跡で、大きい方は男のもので、小さい方は女のものであつた。わたしは自分の足をあてゝみてそれらを鑑定した。小さい方は美智子の足跡にちがひない。四阿のすぐ前のところで、それらがひどく入りみだれてゐた。

屋根の下のところの砂地に一つの小さい穴があつた。それは疑ひもなく人のあけた穴であつた。

わたしはその穴のところから向ふへつゞいてゐる足跡を辿つて、二百ヤードか三百ヤードほどゆくと、森のふちのところでもつゞりと足跡が絶えてゐる。此處から森へ入つたのであらう。わたしも森へ入つていつた。暫くは何の形跡もなかつたが、とう／＼木の間にすかな足跡——一人の足跡のつゞいてゐるのを見出した。それは村の方角へつゞいてゐた。わたしは又それを辿つてゆくと、やがて他の足跡と交叉したところへ出た。さア、どれをついて行つたらよいか、わたしは思ひ惑つて暫く立ちどまつたが、ふと刺々した木の枝にシヨールの切れらしいものが引かゝつてゐるのが眼にとまつた。よく見ると、それは見覚えある美智子のシヨールの千切れに違ひなかつた。わたしはすぐにその方角を辿つた。

いつの間にか森を出切つて、家の裏手へ出たので、わたしはほつと安心した。何故ならば、美智子がきつと不安な形勢を発見して、わざ／＼こんな廻り路をして家の方へ歸つたに違ひないと思つたからである。

わたしはわざと前庭を廻つて、勝手口の方から家の内へ入つて行つた。

女中部屋を通つたら、最初に女中頭に出會つた。

「奥さまは何處にいらつしやるか、あなた知りませんか？」

「奥さまは少し前に旦那さまと御一しよにお歸り遊ばしました。そして鞠子さま、何か事件があつたやうでございますよ。」

わたしは、がっかりした。

「怪我でもしましたか？」

「いえ、いえ、(神さまに感謝します)お怪我ではございません。けれども奥さまは泣きながら二階の寢部屋いらつしやいました。そして旦那さまは、今すぐ春やに暇をやれと仰しやいました。」

春やは龍若莊から連れて來た美智子付きの女中である。氣立てがよくて、親切な娘で、數年間美智子にかしづいて來た女中で、この黒水莊で、わたし達二人が信用をおくことの出來るたつた一人の忠

義な人物であつた。

「春やは何處にゐます。」

とわたしは訊ねた。

「只今わたしの部屋にをります。あの娘はもう氣が顛倒してをりますので、しばらくじつと坐つて、氣を落ちつけるやうに云つてやりました。」

わたしは女中頭の部屋へ行つてみた。春やは部屋の隅で、自分の荷物を傍へ置いて、泣きくづれてゐた。

娘は急にお暇の出たわけを説明することが出来なかつた。男爵の命令によれば、暇を出すことを一ヶ月前に告げる代りに、一ヶ月分の給金を餘分にやるから、すぐに出て行けといふことであつた。理由も聞かされないし、粗略があつたといふ御小言もない。そして美智子に訴へることは禁ぜられた。暇乞ひのために美智子に會ふことさへ許されなかつた。かの女は理由も告げられず、暇乞ひの挨拶もなしに、しかも今すぐに出てゆかねばならぬ身の上であつた。

わたしはあはれな娘を慰めた。

「それで、お前は今夜は何處で泊るつもりなの？」

「村の小さな宿屋で泊ります。あすこのお主婦さんはわたし達と懇意で、大へんいゝ人でございます。わたしは明日早くカンペーランドの方へ發ちます、いゝえ、倫敦へは寄りません。倫敦には知り人はございませんから。」

わたしはすぐに思ひついた。春やが此邸を出てゆけば、わたし達はかの女を通して、倫敦や龍若莊と安全に通信を取交はすことができる。

「春や、ほんとうにお氣の毒だけれど、かうしてお暇が出たといふのも何かの因縁だらうから、あきらめなさい。その代りわたし達は、出来るだけお前のためを計ります。今夜お前の奥さまから何か云つてやるかも知れないから、お前はその便りを待つておいで。そして、お前はその云ひ付けのとほりに守らなければいけませんよ。」

わたしは小聲でかう云ひふくめてから、握手をして、春やと別れた。

わたしはすぐに二階へあがつていつた。美智子の寢部屋は、廊下へ開けてゐる控への間の奥の戸口から入つてゆくやうになつてゐる。私はその戸に手をかけたが、開かない。内側から錠がおりてゐた。仕方がないから、叩くと、別の女中が錠をはずして、戸を開けた。それは前にわたしが死にかゝつた犬を連れて歸つたときに、無慈悲なことをいつてわたしを憤らせた、あのでぶく／＼肥つた、大き

な體の女中であつた。わたしは、あの時から、かの女は松といふ名前で、一番手におへない、だらしない、頑固な女中であることを知つた。

松は戸を開けたまゝ、黙つてにや／＼笑ひながら、闖に突立つてゐた。

「なぜそこに立つてゐるの？ わたしが入らうとしてゐるのが見えませんか。」

「此處はあなたの入るところぢやありません。」

松はさういつて、またにやりと笑つた。

「何ですつて？ わたしに向つて、何といふ口の利き方です？ サア、退きなさい。」

松は太く赫ぶくれた腕を左右に突張つて、戸口に立ち塞がつた。そして、その痴鈍な頭を振つた。

「旦那さまの命令です。」

さういつて、また頭を振つた。

わたしは有りつたけの自制心を奮ひ起して、この女と争ふことをやつと思ひとまつた。そして、物をいふなら、主人に云つてやらうと決心した。それで、わたしはこの女を見向きもしないで、階下へ駆け降りて、男爵の在り所をさがした。男爵からどんなに氣に觸れることを云ひかけられても、あくまで自分の癩癩を抑へてきた平生の心懸けをば、この時ばかりはすっかり忘れてしまつた。だが、この

時の癩癩はわたしのためになつた。これまでこの邸であんなに苦しめられ、壓迫されて來たわたしが、今日これほど憤つたといふことはたしかにいふことであつた。

一八、面責

客間も朝の食堂も空つほであつた。圖書室へ行つてみると、そこに、男爵と、伯爵と、伯爵夫人と揃つてゐた。三人とも立つたまゝで、額をまつめるやうにして、何か話してゐた。男爵は手に紙片をもつてゐた。

わたしが戸を開けて室内へ入つたとき、

「否——千遍以上でも私はいふ、否だ。」

伯爵がこんなことを云ひ張つてゐた。

わたしは、つか／＼と男爵の前へ行つて、眞面にその人の顔を睨みつけた。

「男爵さま、あなたは御自分の妻の部屋を牢獄に替へて、女中を獄卒としてお附けになつたのだと、わたしが解釋してもよろしいんですか。」

と、わたしは詰つた。

「あなたの解釋の通りです。」と彼は答へた。「御要慎なさい。私の獄卒は忠義者ですからね。そして御要慎なさい、あなたの部屋も今に牢獄にならないやうに。」

「あなたも御要慎なさい。御自分の妻やわたしに對して、これは何といふ取扱ひです？」わたしはくわつとなつて、かう叫んだ。「英國には法律があります。法律は男爵の殘虐から婦人を保護します。あなたが美智子の髪の毛一本でも損なふなら、わたしの自由を束縛するなら、わたしは飽くまでも法律に訴へます。」

男爵はわたしの言葉には答へないで、伯爵の方へ向きなほつた。

「私の言つたことに對して、君は今何と答へたね？」

「私の今云つたのは、否だ！」

と伯爵は云つた。

わたしはぶり／＼憤つてゐたけれど、伯爵の落ちついた冷靜な眼がわたしの顔を見たといふことを感じた。そして伯爵はその眼を意味ありげに妻の方へむけた。

すると、夫人はすぐにわたしの傍へ來て、わたしと並んだ。そして誰も口を開かないうちに、かの女は男爵に向つていひかけた。

「わたしの申しあげることをお聞き下さい。」それは明晰で、冷たい調子であつた。「男爵さま、わたしはあなたの御歡待を感謝します。けれども、わたしは今日限りこの御歡待を御辭退します。わたしは御自分の奥さまや鞠子さんに對して、今日あなたがなさつたやうな態度で、婦人を取扱はれる御邸には、この上御世話になることができません。」

男爵は一步後へ退つた。死んだやうな沈黙で夫人の顔を見まもつた。

だが、わたしは早くも察した。いや述べられた夫人の宣言——それは男爵があらかじめ承知してゐたものに違ひない。夫人は良人伯爵の許しなくしてこんな大膽な行動のできる女ではない。それだけに、男爵は驚愕で化石したやうな風をしてゐる。

伯爵は友達の傍に立つて、感嘆して自分の妻の様子を見てゐたが。

「壯嚴だ。」

と、彼は口のなかで云つた。そして、つか／＼と妻の傍へ行つて、妻の手を執つて自分の腕に組みあはせた。

「サア禮子、私はお前のお伴をしよう。」

伯爵はこれまでに見たことのない靜かな威嚴を示した。

「そして鞠子さん、あなたもお伴の名譽を私にお許し下さるなら、腕をお貸ししませう。」

「馬鹿な！ 何といふことだ、これは。」と男爵は叫んだ。彼は伯爵夫妻の悠々と戸口の方へ行くのを睨みつけた。

「平生は私の意思で妻が動くけれど、今日は妻の意思で私が動く。満春君、われ／＼夫婦はたつた一度だけ位置を替へた。そこで帆船夫人の意見は——私の意見だ。」

と、氣心の知れない伊太利人が答へた。

男爵は手に持つてゐた紙片を皺くちやに丸めた。そして何か呪ひの言葉とともに伯爵を押しつけて、
「どうなりとも勝手にするがよい。そしてこの結果がどうなるか見てゐるがよい。」

憤激した、しかし半ば嘔くやうな低い調子で、かう云ひながら、自分はさつさと關の外へ出ていつた。
夫人は何か求めるやうにちらと主人の眼を見て、

「男爵は何故フイに出てゆかれたのでせう。」

「それは、お前と私が、英吉利中で一番癩癩のつよい男を正氣に立ちかへらせたのだ。」
と伯爵が答へた。

「そして鞠子さん、満春君はあのとほり正氣にかへつたのだから、きつと奥さまをあんな亂暴な束縛

から解きますよ。あなたにももうあんな侮辱を加へることはないでせう。かうした非常の場合に、あなたは實に立派に振舞はれた。あなたの勇氣は實にえらいです。私はあなたを尊敬します。」

「ほんとうに尊敬します。」

と夫人は暗示するやうに云つた。

「ほんとうに尊敬します。」

と伯爵が唱和した。

わたしは、飽くまでも殘虐を懲さうとした最初の氣力が抜けてしまつた。わたしは堪らなく美智子に會ひたくなつた。四阿で何事が起つたのか、早くそれが聞きたかつた。わたしは見得をつくつて、伯爵夫婦がわたしに話しかけると同じやうな調子で應答へをしてゐたけれど、どうかすると、急に言葉が途切れて、胸がくるしくなつた。しまひには黙つて、何か待ちもうけるやうに、戸口の方ばかり見てゐた。

伯爵はわたしの心を察して、つと室外へ出ていつた。と同時に、男爵の重々しい足音も階段を降りてゆくやうであつた。わたしは、彼等二人の囁き合ふ聲を聞いたとおもつた。

その間に夫人は早速わたしに話しかけた。男爵があゝの亂暴な行ひを後悔すれば、自分達夫婦も此邸

に止まることのできるから、つまり皆んなの仕合せだといふことを、例の物しづかな、古風な言ひ廻しで、くどくどと聞かせるのであつた。

夫人がこれを云つてゐるうちに、室外のひそく話が終わつた、と思ふと、戸があいて、伯爵がかへつて来た。

「鞠子さん、仕合せなことには、権田原夫人はふたたびこの邸の主婦になりました。かういふことは満春君からよりも、私からお知らせする方が、あなたも氣持がよからうとおもひまして、わざと私から申しあげるのです。」

「優美に仰しやつた。」

夫人はさういつて、先刻良人から「莊嚴」だと讃められたそのほめ言葉に酬いた。伯爵は、他人から儀式ばつた讃辭をうけたときのやうに、お辭儀をして、まづわたしを通らせるために、後へさがつて、途を開けた。

わたしは大急さで二階の美智子の寢部屋へ行かうとして、客間の傍をとほると、男爵はそこに立つてゐた。さうして伯爵に、圖書室から早く出て来るやうに呼んでゐる彼の聲を聞いた。

「いつまで其室にくづくしてゐるんだ。私は君に話がある。」

「私はひとりで考へてゐる。もう少し待つてくれ、満春君、もう少し待つてくれ。」

こんな問答を聞きながら、わたしは二階へあがると、いきなり廊下を駆けぬけて、美智子の寢部屋へ行つた。あまり急いで、あまりあわてたので、控への間の戸を閉めるのをわすれた。美智子の寢部屋は入るときに閉めたけれど。

美智子は部屋の奥の方にゐた。かの女は卓子にくづおれて、顔を両手に埋めてゐたが、わたしを見ると、うれしさの叫びと共にたち上つた。

「どうして此室へ來られたの？ 誰が許したの？ 男爵ぢやないでせう。」

「それは、もちろん伯爵です。あの人の勢力は大したものね。」

美智子は厭だといふ仕草で、わたしの言葉を遮ぎつた。

「伯爵のことは云はないで下さい。あんな悪い人はありません。あの人は間諜です。」

丁度それを云ひ終つたときに、戸を軽く叩く音がした。わたし達はぎよつとした。

わたしはまだ椅子に掛けてゐなかつたので、すぐに戸口へ誰が來たかを見に行つた。戸をあけると伯爵夫人が闕の外に立つてゐた。わたしのハンケチを手に持つてゐた。

「鞠子さん、階段のところはこのハンケチが落ちてゐましたから、自分の部屋へ歸るついでにお届け

しました。」

夫人はうまれつき蒼い顔だけれど、このときは幽霊のやうに眞蒼なので、わたしはびっくりした。いつもしつかりした手附きの女だけれど、ハンケチをのべた手はぶる／＼ふるへてゐた。狼のやうな凄惨な眼で戸の開きまから美智子を見つめた。

かの女は叩く前に、立ち聞きしてゐたに違ひない。わたしは、その眞蒼な顔や、ふるへる手附きでそれを覺つた。美智子を見据えた眼付きでも、それがわかる。

やがて、かの女は無言つてくるりと向ふをむいて、悠々とかへつて行つた。わたしは戸を締めきつた。

一九、腕の痕

「あゝ、美智子さん、取りかへしのつかないことをしたのね、あなたは伯爵を間牒だなんて云つたものだから。」

「鞠さん、あなただつて伯爵の仕業を知つたなら、やはりさう呼ぶでせう。加奈子の言つたことは本統でした。昨日四阿でわたしがあの女と話してゐたときに、あの女は見張つてゐる者があるといひま

した。それは……」

「伯爵でしたの？」

「たしかに伯爵です。あの人は男爵の間牒です。あの人は昨日のことをすつかり男爵に報告したものですから、今日は男爵が自分で朝から沼の方へ出かけて、見張りをしたではありませんか。」

「加奈子は來ましたか？」

「いゝえ、あの女はきつと勘づいて避けたのですわ。わたしは四阿へ行つたけれど、誰もゐませんでした。」

「それで？」

「わたしは四阿のなかで五分間待つてゐました。けれども來ないものだから、じれつたくなつて、あの邊を少し歩きました。砂地にふと文字のやうな跡があるのを見附けて、よく見ると、それはやはり文字で「見よ」と書いてありました。」

「美智子さん、あなたはその砂を除けて、穴をこしらへたでせう。」

「どうして、あなたそれを知つて？」

「わたしは後で行つて、その穴を見たんですもの。そんなことはどうでもいゝから、まア先を話して

頂戴。」

「そこを掘つてみると、加奈子の走り書きした紙片が出てきました。」

「それは何處にあるの？」

「男爵に奪られてしまひました。」

「あなた、その文句を記憶えてゐて？」

「大體は記憶えてゐます。短かいんですよ。」

「まづそれを聴かして頂戴。」

わたしは、美智子が云つたとほりを次に書き付けよう。

わたしは昨日あなたとお話してゐるうちに、背の高い、肥つた老人に見附かりましたから遁げました。幸ひにその人の足は遅かつたので、わたしに追ひつくことができませんでした。わたしは木の間に姿をかくして、やつと遁れました。それで、わたしは今日こゝへ来ることは止めました。このことをあなたに御知らせするためにこの手紙を埋めます。今は朝の六時です。この次は、あなたの悪い良人の秘密についてお話するときは、人に聴かれぬやうに十分要慎しなければなりません。さうでなければ、何もお話ししない方が安全です。忍耐して下さい。必ずまたお目に懸ります。

す。遠からずお會ひすることを御約束します——

か、か。

「背の高い、肥つた老人」の誰であるかは、分りきつてゐる。

伯爵から昨日すつかり報告を聴きとつた男爵は、果して何を發見したかといふことがわたしの興味をひいた。

「あなたは、砂のなかから手紙を見附けたときは、それを何うしました？ それからどうして男爵に奪りあげられたの？」

「見附けると、大急ぎで一度読んで、それから四阿へ入つてゆつくり読みかへしてゐると、紙の上をチラと影が通つたとおもひました。ふと顔をあげて見ると、男爵が戸口のところでわたしを睨みつけてゐるではありませんか。」

「あなたは直ぐに手紙を隠さうとしたでせう。」

「さうです。けれども男爵は止めました。」

「隠さんでもいゝ、私は偶然にその手紙を読んでしまつた。」

さう云ふんでせう。わたしはおどくして、男爵の顔を見あげるだけで、何もいふことが出来ませんでした。

男爵はまた云ひました。

「私は二時間も前に砂から取りだして、一度読んでしまつて、また埋めておいたのだ。お前は昨日ひそかに加奈子とこゝで面會した。今日はこのとほり手紙をうけ取つてゐる。あの女はまだ捉まらないが、お前は私に捉まつてしまつた。サア、手紙をこつちへよこさない。」

さう云つて、つか／＼とわたしの方へ寄つて來ました。わたしは何うすることも出來ないので、むざ／＼奪られてしまひました。」

「それから男爵は何と云つたの？」

「初めは何もいひません。わたしを四阿から引づり出して、誰も見てゐはしないかと四邊を見廻しました。それから、わたしの腕をしつかり押へつけて、

「加奈子は昨日お前に何を云つたか、加奈子のいつたことを一言も残らず皆んな私に云つてしまへ。」さういつてわたしを脅しつけました。」

「それで、あなたは皆んな云つてしまつたの？」

「云はなければ、わたしの腕が碎けさうですもの。云つてしまふより外はありませんでした。」

「かあいさうにね。腕に痕がついたでせう。ちよつと出してごらん下さい。」

「なぜですか？」

「わたしそれが見たいの、美智子さん。何故つて、わたし達はもう忍耐を止めなければなりません。さうして今日から抵抗を始めなければなりません。その痕は男爵を責めるのに、武器になります。」

サア、わたしに見せて頂戴。わたしはきつとこの誓を取つてあげます。」

「鞠さん、さう大したこともないのよ。そんなに仰しやらないで下さい。今はもう痛みは止まりましたから。」

美智子は腕をまくつて、その痕を出してみせた。それは過去の苦惱と、動哭と、戦慄の痕であつた。

それは、わたし達女といふものが男子よりも好いものか悪いものかを語つてゐる。もしも誘惑が女の上に落ちてその女を癡狂にするものならば、わたしはこの腕の痕を見た瞬間に誘惑にかゝつたと云つてもよい。だが、神さまに感謝します、わたしはそんな氣振りを些しも美智子に覺られなかつた。素直で無邪氣な美智子は、わたしが單にかの女やわたしのために驚ろき且つ悲しんだとしか思はなかつた。その他の猛しい心をわたしがこの時に起したといふことには氣が付かなかつた。

「そんなに氣にしないで下さい、鞠さん。」とかの女は袖をおろしながら、單純に云つた。「もう痛みはしないんですから。」

「このことについては、わたしはあなたのために静かに考へてみなければなりません。それはさうとあなたは加奈子の云つた言葉、昨日わたしが聞いた通りを残らず男爵に話しましたか？」

「皆んな云つてしまひました。わたしは恐ろしくて、云はないわけにゆきませんでした。」

「それから男爵は何うしました？」

「わたしを疑ぐつて、せうら笑つてゐました。そして、それだけではあるまい、まだ秘してゐることがあるだらう、残らず白状してしまへといつて、わたしを責めました。わたしは、皆んな云つてしまつて何も秘してゐることはないといつても、きません。」

「飽くまでも聞き出してみせる。お前の義姉からも聞き出さねばならん。眞實を告白するまでは、お前たちを會はせることが出来ない。」

そして、男爵は自分でわたしをこの寢部屋へ連れて來ました。そのとき、春やが此室で働いてゐました。男爵は春やを見るとすぐに出てゆくやうに命じて、

「春、お前は謀叛人の仲間入りをしないやうに要慎しろ。今日暇をやるから出てゆきなさい。奥さまに女中が必要なら、わたしが他の女中を選んであげる。」

と云ひました。男爵はそのまゝわたしを此室へ押しこめて、自分で錠をおろしました。そしてあの

馬鹿の松を見張り番に付けました。鞠さん、先刻の男爵の見暮といつたら、ほんとうに氣狂のやうでしたわ。」

「まったく氣狂の沙汰ですね。きつと犯した罪が恐ろしいのだ、氣が狂つたのですよ。わたしは昨日加奈子の言葉をあなたから聞いて、必ずあなたの奸悪い良人の破滅になるやうな容易ならぬ秘密があるとおもひました。わたしでさへさう思ふくらゐですもの、弱點ある男爵が聞いたら、あなたにその秘密を知られたと思ふのが當然ですわ。ですから、あなたがいくら知らないといつても承知しないのです。」

わたしはあなたを驚ろかすためにこんなことを云ふではありません。かうなつては、あなたはもう、眼を開いて、御自分の立場を考へなくてはいけない。ね、わたしは自分でわたし達を保護するために大いに奮闘させよう。今日は伯爵が干渉したので、わたしとあなたとこのやうに會ふことができなければ、この次にはあの人も干渉から手を引くかも知れません。」

男爵は春やに暇をやつたといふのも、あの娘が惻怍で、あなたに忠義だからです。そして、その代りに番犬のやうな馬鹿の松を附けたのです。わたし達は今のうちに機會を利用しなければ、男爵は次の次にはどんな残酷な企らみをするか知れたものではありませんよ。」

「あゝ、わたし達はどうしたらいいでせう。いつそ、この邸を逃げ出させようか。」

「お待ちなさい。此邸にわたしが附いてゐる間は、あなたは、まつたく孤立してゐるのではありませぬよ。」

「わたしもさう考へませう——いゝえ、さう考へて安心します。そして鞠さん、春やのことも考へて下さい。あの娘はかあいさうですからね。」

「それは、考へてゐますわ。わたしは此邸へ来るまへに、あの娘に會ひました。そして今晚あの娘に言傳をする約束をしました。この黒水荘では手紙を郵便袋に入れることは危険でせう。それですから今日わたしはあなたのために二通の大切な手紙を書きます。そしてそれを春やの手に渡します。」

「それは何の手紙？」

「一通はあなたの法律顧問の輕井さんに書きます。輕井さんは、この前の手紙に、何か變化の起つた場合は必ず盡力すると云つてよこしました。わたしは法律の詳しいことは知らないけれど、法律は、今日のやうな良人の殘虐な取扱ひから妻を保護しなければなりません。加奈子のことはまだ不確實ですから書きませんわ。法律家はあなたの腕の痕について知る必要があります。わたしは今夜寝るまへに手紙を書きます。」

「けれども鞠さん、その手紙がまた露はれたらどうしませう。」

「わたしもそのことは考へました。だが、露はれるといふことについては、男爵はあなたよりもよつほど恐れてゐますわ。ですから、露はれる段になつても、今度は男爵の方から安協してきますよ。」

さう云つて、わたしは起ちかけた。美智子は心細いといつて、わたしを傍から離さうとしない。

「あなたが手紙なんか書いて露はれると、男爵はきつと捨て鉢になりますよ。さうしたら、わたし達の危険は十倍になるでせう。」

さう云はれてみると、それも有理だとおもつた。けれども、わたしはまるつきりかの女に同意することもできかねた。わたし達のやうな恐ろしい立場では、思ひきつて危険を冒さなければ、助けも希望も得られない。わたしはその理由をよく、美智子に云つて聞かせた。かの女はほつと嘆息したけれども、別に反對をするでもなかつた。

「それから、もう一通は誰に書くの？」

「それは、あなたの叔父さまにあげます。叔父さまは何といつても、男の親戚のうちで一番近い肉親で、笛森家の家長ですからね。叔父さまは今度のやうなことには、ぜひと干渉して下さらなければなりません。」

美智子は悲しげに首を振った。

「それは、わかつてゐます。叔父さまは弱くて、我がまゝで、俗な人には違ひありません。けれども男爵とは人柄がちがひます。第一、叔父さまには帆船伯爵のやうなわるい友達がついてゐません。わたしは叔父さまの親切から何をしようともおもはないけれど、その代り叔父さまは、御自分の懶惰をあまやかすためや、御自分の平穩を保つためなら、何でもやる人です。ですから、わたしは、今叔父さまが干渉して下さらなければ、今後いろ／＼な面倒や、災難や、責任が、皆んな叔父さまにかゝつてゆく、それゆゑ、叔父さま御自身のために是非御奮發をねがひますと、さう書いてあげませう。わたしは、叔父さまの操縦にかけては、すっかり呼吸を呑みこんでゐるから大丈夫よ、美智子さん。」

「そんなら、鞠さん、どうぞ叔父さまにお願いして頂戴。わたしは少しの間龍若莊に歸つて、靜かな生活がしてみたくなりました。さうしたら、結婚前のやうな幸福な氣分になれるかもしれませぬ。」

かうした美智子のねがひは、わたしの考へを新しい方向に導びいた。それで結局二つの方法がある。一つは、美智子を保護するために、男爵に對して法律上の干渉をすること。もう一つは、生家を訪問するといふ口實で、美智子を暫く龍若莊へ歸らせることである。この第二の方法はとても男爵が承諾しさうもないけれど、とにかく當つて碎けるといふつもりで、それを試みるだけの價値はある。

「美智子さん、今あなたのいつたことを、とにかく叔父さまにお願いしてみませう。それについて輕井さんの意見も求めませう。うまく行くかも知れませぬよ。」

さう慰めて、わたしはふたゝび起ち上つた。美智子はまだ離さうとしない。

「鞠さん、行つては厭。手紙なら此室で書いたつていゝぢやありませんか。」

と美智子は頼りなげに引き止めるのであつた。だが、わたし達は二人きりであまり長く此室に止まつた。これから度々會はうとすれば、何でも新たな疑ひを起させないことが肝腎だ。階下では、あの悪者どもが、今もきつとわたし達の噂をしてゐるにちがひない。

「美智子さん、わたしは階下へ顔を出さなければなりません。一時間ほど経つたら、また此室へ來ますからね。」といつて美智子をなだめて、

「今日はもうこれで大丈夫よ。勇氣を出して、氣を落ちつけていらつしやい。」

「鍵は戸にはまつてゐますか、鞠さん。内側から錠をおろしておきませう。」

「え、鍵はこゝにあります。しつかり錠をおろして、わたしが歸るまでは、誰が來ても開けてはいけませんよ。」

わたしは、かの女にキスをして、戸口を出た。そして廊下を歩きながら、うしろに錠をおろしてゐ

る鍵の音を聞いた。わたしはほつと安心した。美智子の寢部屋には彼の女の許諾なしには、もう何人も入ることができない。

白衣の女 (開闢の巻) — 終 —

大正十年七月十五日印刷
大正十年七月廿六日發行

(白衣の女—開闢の巻)
回定價金貳圓五拾錢

不許
複製

譯者 田中 豊松

發行者 福岡 易之助

印刷者 猪木 卓二

東京市神田區南神保町二番地

發行所

白水社

電話(長)九段一九二二三番
振替東京一九二二三番

佛國 ウーージェーヌ シュウウ著
文學士 福岡雄川 譯

四六判最上製函入 定價金貳圓五拾錢
 小活字四百五拾頁 送料金拾一二錢

青銅のメダル

(犯罪の卷)

ウーージェーヌ・シュウウは、十九世紀佛蘭西浪漫派高潮期の偉大なる作家の一人で、想像力の富豊と性格描寫に秀でた點に於て特に有名である。
されば彼の作は、いづれも非常に構想の複雑した變化に富んだものが多く、其の點に於ては、殆んど彼の右に出でるものがあるまい。しかも、全篇を通じて流るゝ、人類に對する熱愛、理想と正義を渴仰する敬虔なる至情は、讀者を緊張し興奮せしめずには置かない。
本書は彼の三大傑の一たる *The Brevet* (漂泊の猶太人) を譯出せるものであつて、かの傳說的放浪者の後裔なるフランス一家族の七人の子孫が、あらゆる迫害の爲に國外に分散し、或者はシベリアに、或者は印度に、或者は巴里に、或者はアメリカに、幾多の憂き艱難を忍びつゝ、ます／＼執拗に、ます／＼悪辣に襲ひかゝる迫害と奮闘し、其の網の目の如き詭計の中をくゞつて、親から傳へられた秘密文書と青銅のメダルとによつて、其の命ぜられた行動を取るといふ、脚色の妙を極めたもので、著者の豊富なる想像力を縦横に驅使して、彼等七人の子孫をめぐる奇異な運命と事件を経とし、陰險な迫害を緯として織りなされた一大雄篇は、彼のユーゴーのラ・ミゼラブル(噫無情)と其の軌を一にし、而もより以上の緊張味を發揮せる名著である。

佛國 モーリス・ルブラン著
文學士 福岡雄川 譯

近代世界 第一編

二重眼鏡の秘密

上製金壹圓貳拾錢
 送料 金 八 錢

現代佛文壇の巨匠、最新探偵文學の權威であるルブランの作中甚だ趣の異つたもので、非常に偉い星晃(リュバン)は、本篇では初から受身の地位に立ち、悪戦苦闘の限りを盡くし、殊に其秘密は最後まで扉を開かず、讀者は波瀾重疊の間宛も美しい迷宮を引廻はされて居ると、最後に猛然と攻勢に轉じて、遂に忍耐と正義が勝を制するといふ、變幻出没極りなき軌近の傑作。

佛國 モーリス・ルブラン著
文學士 福岡雄川 譯

近代世界 第二編

巨盜の告白

上製金壹圓貳拾錢
 送料 金 八 錢

嘗て惡の爲に惡をなさず、公然天下に向つて目的物と時日とを發表しつゝ、而も完全に竊取し終る星晃(リュバン)の神技愈々訝えて思はず快哉を叫ばしむ。本篇收むる所は反射鏡の秘密、眞紅の肩掛、壁畫の女、謎の家、思はぬ罪、星晃の結婚、夢小路家の後裔等、何れも歐米の社會を驚倒せしめたる最近の快著。

英國 コナン・ドイル著
文學士 芳野 青泉譯

□ 近代世界 □ 第三編 □

恐怖の谷

□ 上製金壹圓貳拾錢 □
□ 送料 金 八 錢 □

ルブランと對峙して盛名を壇にせるコナン・ドイル最近の傑作。名探偵ホルムスの慧眼冴えに冴えて人を魅殺せしむる血の香絶えざる罪惡の巢窟「恐怖の谷」の秘密を探らんと敢然身を投じたる一俠漢、之を戀せる可憐なる美人、數奇曲折の運命は讀者をして肉跳り血を湧かしむる。

英國 コナン・ドイル著
文學士 芳野 青泉譯

□ 近代世界 □ 第四編 □

名馬の行方

□ 上製金壹圓貳拾錢 □
□ 送料 金 八 錢 □

ホルムス一流の推理探偵は愈々出で、愈々妙。忽然として姿を隠せる名馬の行方、音無くして紛失せる機密文書、深谷の邸の殺人、森の船室、大地主、男爵夫人等に纏綿せる大秘密は、相追ひ相搏つの間、ホルムスの手により快刀亂麻の如く剔抉せらる。一讀神飛び骨鳴るの快著。

佛國 アルベール・ボアッシー著
文學士 福岡 雄 川譯

□ 近代世界 □ 第五編 □

復讐の結婚

□ 上製金壹圓貳拾錢 □
□ 送料 金 八 錢 □

架空なる夢想的冒險小説に非ず、未だ我が讀者界に現はれざる奇々怪々の小説。十二年前妻に因つて受けたる屈辱を、あらゆる手段を以て復讐せんとする一富豪が、奇禍に遭へる一美術家を拉去つて其の傀儡師となり、一夜恐るべき毒藥を以て顔面を燒爛し其の生涯を別人に装はしめ、妖艶な美人を好餌として演出する活舞臺は、何人も戰慄を禁じ得ない。假面の秘密は永久にとけぬ謎となつてゐる。

彌太吉翁捕物帳
泉 斜 汀著

□ 近代世界 □ 第六編 □

亂刀

□ 上製金壹圓貳拾錢 □
□ 並製 金 壹 圓 □
□ 送料 金 八 錢 □

準と異名された舊幕の與力で今年八十餘歳になる彌太吉翁の實話である。當時江戸一番と云はれた名妓小里と旗本の俊秀庄之丞との濃艶なる戀物語を背景とせる復讐美譚「亂刀」以下、佐官の上、金時平、花扇の死、七人組等、其他何れも艶麗と波瀾に富める探偵情話で、歐米のそれにも比すべき場面變化を極め、而も其間に本邦獨特の優雅なる情趣あり、讀者をして恍惚として夢幻の境に彷徨せしむるあり、著作得意の傑作である。

英國 リチャード・マーシュ著
文學士 芳野 青 泉 譯

□ 近代世界書 □ 第七編 □

甲 蟲 の 怪

□ 上製金壹圓貳拾錢 □
□ 並製 金 壹 圓 □
□ 送料 金 八 錢 □

一代の怪辯家某代議士、妍妖なる美婦某女、世界を驚倒せしむべき毒瓦斯の研究に腐心する某科學者等が、甲蟲の幻靈に悩まされ、世にも不可思議なる驚異の物語。歐米の新報紙評して曰く「本書は怪著中の最大怪著にして、獨居の際などに讀むべき書に非ず、之を繙かんとせば先づ背後側邊に人影なきやを確むべし、然らざれば卒忽として恐怖に襲はれ巻を擲ちて慄竦すべし」と、以て如何に驚天動地の怪著たるかを知るべし。

英國 ロバート・ルイス・ステヴンソン著
文學士 田 中 早 苗 譯

□ 近代世界書 □ 第八編 □

漂 泊 の 青 年

□ 上製金壹圓貳拾錢 □
□ 並製 金 壹 圓 □
□ 送料 金 八 錢 □

名門の一青年が残忍なる叔父と怪船長のために誘拐せらるゝを發端とし、編中に活躍する者は熱血の志士、叛黨の巨魁、非道の代官、盲山賊、俠美人等、皆尋常一様の人物に非ず、而も舞臺は水郷と古城と高原の蘇格蘭にして、驚心駭目の事件は清冷奇峭の風光と相映じ、世界的文豪の靈筆真に一讀人の魂を奪はんと欲す。久しく期待されたる此の名編の邦語譯初めて成る。

英國 イー・ビー・オツベンハイム著
文學士 吉 川 宏 一 譯

□ 近代世界書 □ 第九編 □

王 妃 の 戀 文

□ 上製金壹圓貳拾錢 □
□ 並製 金 壹 圓 □
□ 送料 金 八 錢 □

突如として深夜に忍び込める若く氣高き黒衣の美人。其の居室を襲はれて不思議にも却つて熱烈なる戀に陥れる若き記者は、夢幻の境を曳かるゝ如く裳の影を追つて走る。狡智狐の如き間謀を一撃に倒せる勇士の獅子の如き長髪に降る佳人の涙。白紛の花に琥珀の美酒を注ぐ成金の豪奢を絞めたる紅の絹緒は、長く、南阿より英佛の間に紛糾して、場面の變化實に三十幾轉、登場人物十數人、戀と涙と、邪と正と、狡と智と、解けざる祕密の幻影は讀者の眼を眩せしむ。

英國 フレツド・エム・ホワイト著
文學士 竹 中 浩 譯

□ 近代世界書 □ 第十編 □

怪 女 王

□ 上製金壹圓貳拾錢 □
□ 並製 金 壹 圓 □
□ 送料 金 八 錢 □

數年奮闘の結果錦を飾つて故郷に歸れる青年紳士は、ありし昔の彼の佛と瓜二つなる而も我名を騙稱する怪しの男が會て其戀人なりし美人を擁して居るのを見て驚倒した。劈頭既に奇異なる此の探偵情話よ。アスチュリヤ王家に傳はる名香を籠めたる寶扇の行方、亞弗利加と歐洲を横行する怪賊團、遊惰の過去より蘇へれる潑刺たる青年紳士と名探偵の活動、之を助くる純清玉の如き美少女、勇氣と聰明と、不敵と巧妙と、紛亂曲折四十餘回の大編。

英國 フレツド・エム・ホワイト著
文學士 竹中 浩譯

□近代世界
快著叢書 □ 第十一編 □

黒い自動車

□上製金壹圓貳拾錢 □
□並製 金壹圓 □
□送料 金八錢 □

實玉と光彩と、名香と美酒と、白晝をあぢむく電燈の下に、世界の歡樂を集めたるが如き伯爵夫人の宏大美麗なる邸宅に隣して、之は又何たる寂寞閑憺たる住居であらうか。闇より闇に音もなく走る黒色の自動車は、光明と暗黒を縫うて如何なる活劇を演ずるであらうか。コルシカ魂の響きに飢ゑたる白刃の一閃する間に、純潔玉の如き少女の纖手の勇士にも優る豪膽と機敏を見よ、奇怪にして妖艶なる著者得意の探偵小説である。

英國 マックス・ベンバーミン著
文學士 福岡 雄川譯

□近代世界
快著叢書 □ 第十二編 □

要塞の美人

□上製金壹圓貳拾錢 □
□送料 金八錢 □

見渡す限り雪と氷の荒野の一隅に、灰色の冷笑を以て時に人類を睥睨しつゝ、黙々として眠るが如く聳ゆるものはクロンスタットの要塞である。寂寞と空虚の中に夜の帷は下りる。要塞から數百の松炬が列をなし出て来る。氷原の各所に數百の篝火が焚かれ、暴飲と亂舞と狂態と、斯くの如くにして露西亞の淪落せる饗宴は始まるのである。好色と飲酒の外に何物もなき司令官の前に立てる楚々たる美人は何者ぞ？ 才膽共に倫絶せる若き勇士は何を劃策するか！ 而して突如として革命の爆弾は破裂する。著者得意の冒險的探偵快著。

宮内省書記官
兼 參事 官

伯爵 一 荒芳德著

□四六判天金上製 □
□紙數三百餘頁 □
□定價金貳圓 □
□送料拾貳錢 □

改造物語

著者はいふ……我等が改造の要諦……赤裸々の眞面目に立ち歸り……靜寂に……眞に自己自身の了解が出来なければ眞の改造に出来ませぬ。反動とか、猜疑とか、銜氣や、小さな自分の私利擁護とか、人氣取りとか、乃至は逆上した氣分が少しでもあつては眞の改造は出来ませぬ……と、以て著者の態度を知るべし。

本書は、華胄の一偉才にして夙に青年團指導家として令名ある著者が、個人、家庭、社會及び國家を根本的に改造せんとする絶叫にして、而も單なる理想論に非ず、何れも實際に即せる新具體案を提供せるものなり。

別に附録として添へたる歐洲紀行は、擾亂の露國よりスカンヂナビヤに、特に、英、佛、瑞の紀行は、困難を極めたる著者自身の自轉車旅行を詳記せるものなれば、路傍の老爺、田園の農夫、旅宿の主婦、酒場の女給、官吏、軍人、教師、學生、巡查等、躍如として紙面に活動し、遺憾なく各國の地方的實情を紹介せる名文なり。

内務書記官
社會課長

田子一民著

四六布裝函入
紙數四百餘頁

定價金貳圓八拾錢
送料金拾貳錢

改造の歐米より

激動の五年を経て勃然として新意義を加味して興れるものは諸種の社會問題である。著者は社會事業施設の當路に在り、殊に最近改造の歐米諸國を巡歴し、其の實際施設の踏査に依つて新研究を重ね、我國の現状に顧みて大に憂慮する所あり、社會改善事業の全般に互り、歐米の實際より、我國の既往と現況に對する批判と將來に於ける施設に關して積極的新案を遺憾なく詳述して、社會の覺醒を促せるものは本書である。

其の隨所に挿める、時事、教育、經濟、思想等の諸問題に關する所感も、皆生氣潑洩たる清新の議案であつて、方に我國現時の清涼劑たるべく、目下行惱中にある諸問題の如きは、本書によつて直に明快なる答案を得べく、何人も自己の爲に一讀すべき名著たるを疑はない。

與謝野晶子著

(橘さゆめ装幀)

四六布裝美本
紙數四百頁

若き友へ

定價金壹圓五拾錢
送料金拾錢

【朝日新聞曰く】「此度の大戰に由つて激成せられた世界の思想の變革の中に在つて、私達日本人の婦人は如何なる覺悟と實行とを必要するかといふ問題に就いて、あらゆる方面から私自身の管見を一般の若い婦人達に提供した」とある著者の言により本書の特色を見るべし。著者の思想の舊型に囚へられずして而も常に穩健に、能く實際を離れざる態度は、本書に於ても遺憾なく之を見ることを得るは最も喜ぶべし。云々。

【報知新聞曰く】著者が最近一年間に發表したる色々の感想中特に婦人の爲めに書いたものを集めたものである。徹底的に考へて完全に自己を發表し得る女性としては著者は現代に於ける第一人者である。本書の價値は敢て喋々するを要しない。篇中所々に挾んだ詩も清新の氣掬すべきものがある。云々。

與謝野晶子著

(石井鶴三裝幀)

四六判上製函入
 ポイント三百頁

女人創造

定價金貳圓貳拾錢
 送料 金拾貳錢

大戦が産んだ世界的改造は、個人より家庭に、家庭より社會へ、社會より國家にと、滔々として激浪の渦を巻いて居る。すべての意味に於いて新しく鹿島立ちするを要する我國は、先づ囚はれたる婦人、誤られたる嬌入、虐げられたる婦人の改造を行ひ、眞實味を帯びたる覺醒せる女人を創造する事が急務である。

本書は、時代の權威者にして常に思想界の先驅たる著者が、個人・社會、すべての方面に渡りて縦横の卓識を女人創造の爲めに吐けるもの。新しき時代に生きんとするものは其の女子と男子たるの別なく此の新聲に耳を傾けられよ。

醫學博士 ウイリアム・ロビンソン 著
醫學士 高橋毅一郎 譯編

四六判函入美本
 紙數三百十五頁
 定價金貳圓
 送料拾貳錢

女とその性的及び戀愛生活

性的近代世界名著叢書の第一編たる本書は、從來の著の如く徒に周知の單なる衛生を説いた俗書ではない、近代性慾學の世界的權威たるロビンソン博士の名著を高橋醫學士が何人にも了解せらるゝやうに最も平易に詳譯せるものであつて、性的普遍性と思想問題、婦人の男子に及ぼす誘引力、ワギニスムス、性的感激と戀愛、性的冷淡性、男女の戀愛及び性的生活の差異、嫉妬と性交、合理的離婚制度、花柳病と拒婚、性的道德の單一標準打破、避妊法と墮脫法、リミテイション、バスコントロール、新マルサス主義等、その他の新問題に關し、悉く近代的享樂主義に立脚して詳述し、且つ一々實例を擧げて新道德に對する新具體案を高唱してゐる。

長田偶得著

□菊判上製美本□
□寫真數葉入三百頁□
□定價金壹圓七拾錢□
□送料金拾錢□

劍聖宮本武藏

【朝日新聞曰く】宮本武藏の名、徒に高くして其面目は却つて多く稗史講談本の爲に誤らる。近來武藏の劍客としての偉器たりしのみならず、又其の人格の大に顯揚すべきものあるを見之が爲に説くもの漸く多きを加ふと雖も、未だ正確なる史料に準據して其事實を究明し、且つ武藏の著述を精讀して能く其精神を發揮し得たるものなし。著者元來此の種の史筆に於て最も得意と稱せらる、蓋し武藏傳として備はれるもの本書其の第一也。云々

【國民新聞曰く】雪舟を畫聖といひ芭蕉を俳聖といふに對して、武藏を劍聖と稱する所以は當に之を劍のみの人と言はんには餘りに偉大なるものあればなり。本書は武藏の生立より説起し其の武者修業を語り、熊本に於ける武藏を述べ、二天一流の兵法に論及して、又其の傳統をも尋ね、更に武藏の藻鑑、劍聖の面目の二章を加へ、最後に年譜を掲げて筆を結ぶ。正確なる典據に暢達の筆を驅使する所、轉に快讀玩賞すべし。云々

陸軍大將男爵 大迫尙敏題字
海軍機關少將 橫山正恭序文

樞密顧問官男爵 細川潤次郎題字
文學博士 薩軍軍監蘇山 石川平太著

西南大西郷の心の奥底

□三六判洋布製函入□
□紙數六百餘頁□
□定價金貳圓五拾錢□
□送料金拾貳錢□

大西郷と著者

十年の役は天下の疑問なり、其の首腦たりし大西郷の心事に至りては、更に疑問中の最大疑問なり。出でては維新同天の大業を翼賛したる忠臣、入りては空しく奸賊の名を負ふ。怪中の怪、奇中の奇、史家決せず、説者断ぜず、幾多の書之を解かんとして終によく解決せるものなし。噫、史上の暗雲は斯くして長く拂ふの日なきか。非ず、今や此の大秘密を闡明すべき鍵綸は、南洲先生の腹心股肱として、其の座臥常住を知り、其の胸臆を眞解せる、蘇山石井平太閣下によりて投ぜられたり。閣下は、慶應三年以降、大西郷に扈從する事十三年、長州征伐に、鳥羽伏見の役に、上野戦争に、奥羽追討に、暫くも其の膝下を去らず。明治六年征韓論破る、や閣下亦兵部省大尉の職を擲つて薩軍に従ひ、十年の役、實に其の軍監たり。不幸可愛獄の突破戦に二十數箇の傷を被りて、南洲先生の死に従ふを得ざりしと雖、石井竹之助の職名は西南戦史に隠れ無きところなり。閣下、天下の事皆非なるを見、大西郷の心事長く世に解せられず、英志空しく傳ふるに由なきを慨し、適々大正元年九月乃木將軍自刃の數日前將軍を訪ひ、膝を交へて大西郷の心の奥底を痛論し、相默契する所ありて、將軍が二百三高地の土を以て焼ける湯呑に手書して著者に賜はる。著者之より増々大西郷の心の奥底を世に語らんとするもの切なるを加へ、七十一の老齡を以て憤然筆を執つて、迂餘曲折に富める生涯、波瀾萬丈の過去を叙し、久しく開かれざりし大西郷の胸底を詳に語る。世を慨し人を歎く千古の英傑史上に活躍して、筆端爛の如く、偉人の心情惻々として滿紙皆涙。天下の快著と云ふも當らず、世界の奇書と云ふも不可、實にこれ史外の秘史を説いて、不世出の英雄が樹てたる國家百年の大計を宣傳する一大經國の書たらすんばあらず。願くば世の操觚者流の類書と同一視する勿れ。謹んで天下に薦む。

1E3F-59

米在塚本慶十郎著

四六判上製函入 定價金貳圓八拾錢 送料金拾貳錢

極光をたづねて

實景寫眞版百數拾挿入

つ綴又さし 苦濼げン積る すの
 極たし學てな世の々らド斷。著案荒ツ
 北著た者。怪ら。のめるた。と行は塚者廢
 の者。而哲奇其果にユエ同をそ本拍
 自然文も人。のるに。がコキのし放は。つ
 と章。その。頭幻。は寂きンモ舞遂溟學
 生は。れ。腦日砂。然。貴河。臺。げ。性。者。れ
 活。は。さ。は。を。金。と。と。の。土。に。た。と。未。技。術。と。叫。び。受。け。た。で。あ。ら。う。而。し。て。更。に。こ。の。極。光。を。た。づ。ね。て。を。讀。む。ん。ら。ば。必
 取。な。悉。以。莊。瀟。し。き。ほ。と。の。涙。を。り。生。し。は。知。術。家。の。境。に。あ。る。よ。り。も。れ。ま。い。極。北。ア。ラ。ス。カ。の。自。然。と。そ。の。偉。力。の。下。に。勞。苦。す。る。人。間
 扱。が。く。著。解。不。は。流。に。活。た。な。所。環。家。で。あ。る。よ。り。も。れ。ま。い。極。北。ア。ラ。ス。カ。の。自。然。と。そ。の。偉。力。の。下。に。勞。苦。す。る。人。間
 つ。一。者。説。る。ふ。は。流。に。活。た。な。所。環。家。で。あ。る。よ。り。も。れ。ま。い。極。北。ア。ラ。ス。カ。の。自。然。と。そ。の。偉。力。の。下。に。勞。苦。す。る。人。間
 斯。篇。の。見。て。光。大。ア。ラ。者。は。て。所。に。遙。く。の。止。み。難。自。か。ら。い。ふ。が。如。く。一。箇。の。放。浪。者。で。あ。る。生。れ。た。る。詩。人。で。あ
 くの。散。聞。る。驚。力。カ。の。地。は。い。と。く。強。烈。な。憶。念。を。も。つ。て。自。然。を。讚。美。し。著。者。の。こ。と。く。人。間
 の。如。文。に。著。者。が。あ。る。地。は。い。と。く。強。烈。な。憶。念。を。も。つ。て。自。然。を。讚。美。し。著。者。の。こ。と。く。人。間
 驚。異。す。む。が。限。隨。兒。實。に。大。自。然。の。神。祕。境。で。あ。る。荒。涼。た。る。曠。野。寂。し。き。都。邑。し。が
 べき。記。録。は。趣。哀。傷。な。文。字。で。あ。る。そ。の。純。眞。な。熱。烈。な。感。情。か。ら。進。し
 歐。米。に。於。て。も。多。く。そ。の。類。を。見。な。い。で。あ。ら。う。

終

複製